

いたずら者(もの)の 野兎(のうさぎ)の 話(はなし)

エチオピア・スーダン(えちおぴあ・すーだん) 国境(こっきょう)の 近(ちか)くに
住(す)む アニユアック族(あにゅあっく・ぞく)の 民話(みんわ)

【言(い)いかえてみました】

ある日(ひ)、野兎(のうさぎ)は 河(かわ)へ 魚(さかな)を 捕(と)りに 行(い)きました。彼(かれ)は ドッサリ(どっさり) 魚(さかな)を 家(いえ)へ 持(も)って帰(かえ)って 来(き)ました。

伯父(おじ)さんが それを見て、「どこで こんなに 捕(と)って来たの？」と 聞(き)きました。

野兎(のうさぎ)が「河(かわ)でさ」といって、伯父(おじ)さんは「では 明日(あす)、私(わたし)も行(い)って、お前(まえ)たちにも どっさり捕(と)ってきて やろう。だが、どうやって 魚(さかな)を 捕(と)るのかね」と 聞(き)きました。

それで 野兎(のうさぎ)は (いつものように、伯父(おじ)さんを からかう ことを考(かん)がえて)、「そうだな、まずトウモロコシ(とうもろこし)の 粉(こな)を 一掴み(ひとつかみ) 持(も)って行(い)きな。水(みず)の 澱(よど)んでいる 所(ところ)が あるから、そこへ行(い)って 水(みず)に 粉(こな)を 播(ま)きな。

そうしたら 魚(さかな)が 集(あつま)って来(く)るから、水(みず)に せなか(背中)を おけて、手(て)を広(ひろ)げて 後(うしろ)ろ向(む)きに 飛(と)び込(こ)みな。

すると 水面(すいめん)近(ちか)くに 集(あつま)って来(き)た魚(さかな)が 陸(りく)へ 跳(は)ね上(あ)げられるから、いくらでも 捕(と)れるよ」と 教(おし)えました。

実(じつ)は、野兎(のうさぎ)は、水(みず)の 澱(よど)んだ所(ところ)には せなか(背中)に 棘(とげ)のいっばい はえた魚(さかな)がいて、トウモロコシ(とうもろこし)の粉(こな)を 播(ま)いたら、その魚(さかな)が 水面(すいめん)に 浮(う)かんで来(き)て それを食(た)べようと するといふ、子供(こども)でも 知(し)っている 魚(さかな)の習性(しゅうせい)を 計算(けいさん)に入(い)れて そう言(い)っているのです。

伯父(おじ)さんは 言(い)われた 通(とお)り 河(かわ)へ行(い)って、沢山(たくさん) 魚(さかな)が 捕(と)れることを 期待(きた)いしながら、少(すこ)しでも 多(おお)くの 魚(さかな)を 陸(りく)へ 跳(は)ね上(あ)げてやろうと、後(うしろ)ろを向(む)いて できるだけ大(おお)げさに 飛(と)び込(こ)みました。

次(つぎ)の瞬間(しゅんかん)「アチチチ(あちちち)」と 彼(かれ)は 悲鳴(ひめい)をあげ、大慌(おおあわ)てで 陸(りく)に 這(は)い上(あ)がって来(き)ました。

彼(かれ)のせなか(背中)は 棘(とげ)つきの 魚(さかな)で 膨(ふ)くれ上(あ)がって いました。

這(は)い上(あ)がったところに ちょうど ヌアル族(ぬある・ぞく)の 男(おとこ)が 通(とお)り 掛(が)かったので、彼(かれ)に頼(た)のんで 棘(とげ)の 生(は)えた 魚(さかな)を 引(ひ)き抜(ぬ)いてもらい、やっとのことで 家(いえ)に帰(かえ)って 来(き)ました。(文責 三谷雅純)

山口昌男『アフリカの神話的世界』(岩波新書F 6 6) を改変



Nord Cameroun Christian Seignobos 1982



Les Danseurs Masques de l'Ouest africain